








令和4(2022)年度 堺アーツカウンシル 活動報告書



目次

	はじめにープログラム・ディレクターからのごあいさつー	3
	堺アーツカウンシルについて	4
	堺市の文化芸術関係図	5
	堺アーツカウンシル令和4年度活動総括	7
	堺市文化芸術活動応援補助金について	9
	令和4年度採択事業紹介	10
	文化芸術活動に関する相談・視察	20
	モデル事業	21
	勉強会	22
	交流会・広報	23
	座談会ー令和4年度の活動を振り返ってー	24



撮影：成田舞

堺アーツカウンシル プログラム・ディレクター

上田 假奈代

堺を走る電車の窓からこんもり古墳の緑が見えると、古代に思いを馳せ、しばらく緑に癒されます。川が見えると、海へ出入りする南蛮の船が行き交ったのだろうと想像します。

これまで、自由・自治都市としてさまざまな交流を行い、堺は文化の薫り高い街であったことでしょう。暮らしや営みのなかで、文化芸術が人々の交流をさらに生み出すのは昔も今も変わりません。コロナ禍を経て、2022年の秋冬から世界の人々が行き交いはじめました。この3年間に起こったこと、悩み、考えてきたことを振り返りたいと思います。

子どもの貧困率はますます悪化し、厳しい状況の高齢者が増えています。堺市では文化芸術活動が地域に根つき、子ども食堂や地域活動に創造的な視点が入ることや、コミュニティのつなぎ役を担う役割を持つことも期待されています。つながりを持っておくことは健康に寄与し、孤立を防ぎ、災害時やもしもの時に役立ちます。文化芸術はその効果をわかりやすく数字で表すのは難しく、コツコツと地道な活動ですが、市民のみなさん、文化芸術の担い手のみなさんとともに対話を重ね、それらを蓄積しながら、堺の今を紡いでいきたいと思います。ずっと先の未来の堺の人たちが検証してくれることを信じて。

令和3年に始まった堺アーツカウンシルはコロナ禍とともにあったわけですが、それらの経験を糧に、みなさんとともに新しい扉を開けて、新しい海に漕ぎ出していきたいと思います。

令和5年（2023年） 秋

堺アーツカウンシルとは

専門知識を有する人材が、文化芸術に携わる人たちを支援することで文化芸術の振興を図り、文化芸術を活用して子育て、教育、福祉、観光、都市の活性化といった様々な分野の社会的課題の解決をめざす組織で、令和3年1月に設立しました。

文化芸術に関する専門知識を有するプログラム・ディレクター（PD）とプログラム・オフィサー（PO）を中心として、堺市文化芸術審議会、堺市文化課で構成しています。

主な活動内容

- 補助金申請・活動サポート
- 文化芸術活動に関する相談受付及び視察
- 勉強会・交流会・モデル事業の開催
- 調査研究・広報活動

プログラム・ディレクター（PD）、プログラム・オフィサー（PO）の紹介

プログラム・ディレクター（PD）

上田 假奈代（詩人・詩業家）

専門分野：ことば、存在の表現

1969年奈良県吉野生まれ。「ことばを人生の味方に」、2003年大阪・新世界で喫茶店のふりをしたアートNPO「ココローム」を立ち上げ、2008年西成・釜ヶ崎に移転。2012年まちを大学に見立てた「釜ヶ崎芸術大学」、2016年ゲストハウス開業

プログラム・オフィサー（PO）

柿塚 拓真（アートマネージャー）

専門分野：音楽マネジメント、芸術団体運営

日本センチュリー交響楽団等で音楽事業制作に従事。国際交流基金アジアフェロシップ、アジア各地や英国の団体との共同事業など海外団体との事業も手掛ける。現在、（公財）神戸市民文化振興財団演奏担当課長として神戸市内管弦楽団/混声合唱団に勤務。

川那辺 香乃（アートコーディネーター）

専門分野：アートプロジェクト、ファシリテーション、身体表現

1985年滋賀県生まれ。普段は小学校等でアートのワークショップコーディネーターを行う。廃校を活用したアートプロジェクト、社会課題をテーマにしたワークショップ、障がい者とともに表現を模索する研究会などにも携わる。最近ではアートプロジェクトの全国ネットワークづくりにも奔走中。

中脇 健児（ファシリテーター）

専門分野：コミュニティデザイン、ワークショップ、ソーシャリー・エンゲイジド・アート

“その場にいる人とその場だからできるコトを考える”「場とコトLAB」を立ち上げる。伊丹市文化振興財団に14年間所属。領域はアート、コミュニティプログラム、地場産業支援、教育、福祉など活動は多岐に。近年はファシリテーションやワークショップの専門家育成など。NPO法人こととふラボ理事。大阪芸術大学芸術計画学科准教授。

宮浦 宜子（食卓ディレクター）

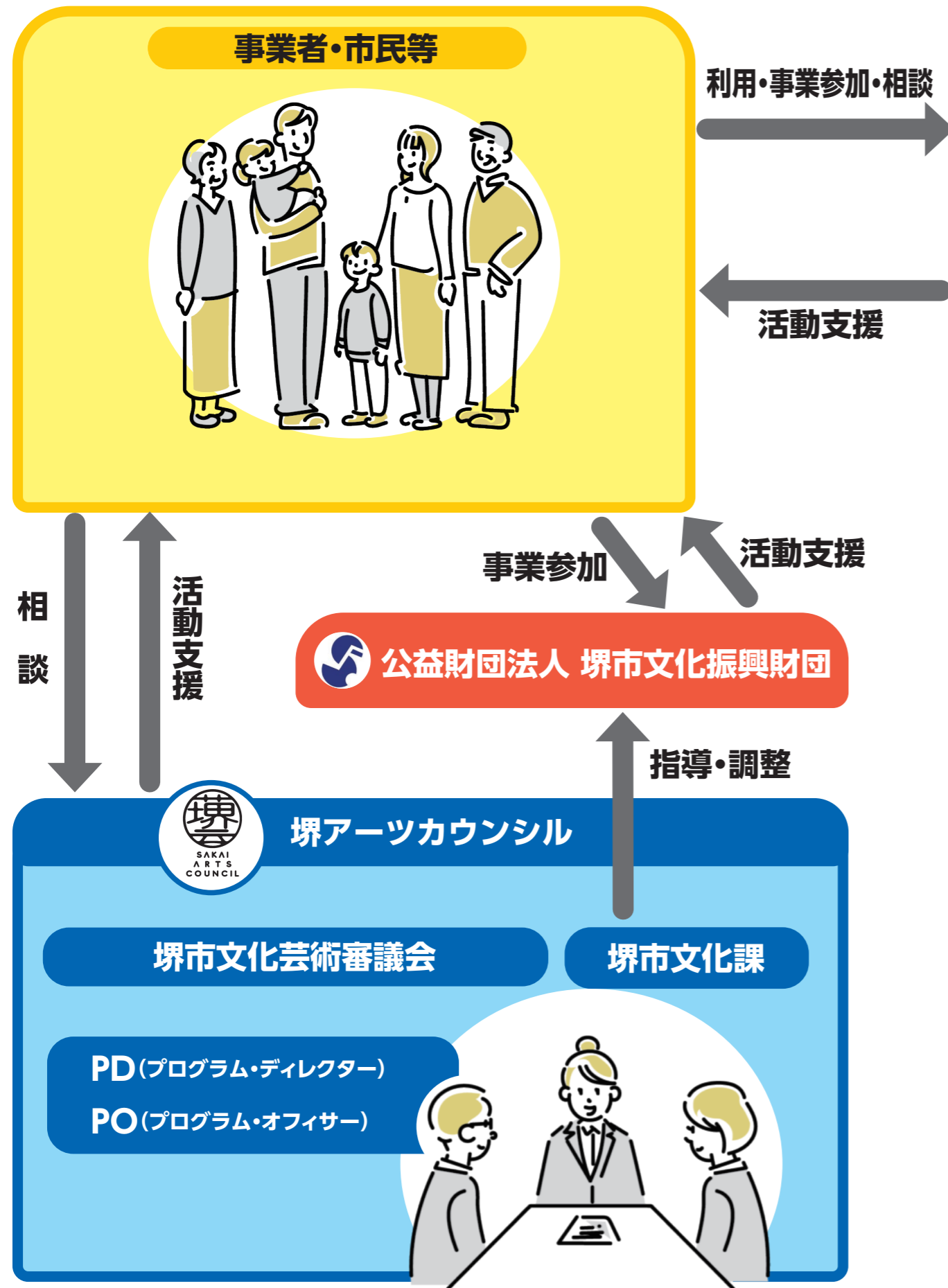
専門分野：教育、地域コミュニティ、食

教育現場でのワークショップや、地域コミュニティでのプロジェクト、アーティストインレジデンス運営などのアートマネジメント業務に携わった後、出会いと交流の場としての「食卓」にアートと共通する可能性を感じ、ワークショップの企画や執筆活動などを行う。近年、北海道から関西に移住。特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち理事。

大澤 寅雄（文化生態観察）

専門分野：文化政策、アートマネジメント

1970年滋賀県生まれ。2003年文化庁新進芸術家海外留学制度により、シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。地域文化を生態系として観察する「文化生態観察」を実践中。合同会社文化コモンズ研究所代表、NPO法人アートNPOリンク理事長、NPO法人子ども地域文化コーディネーター協会専務理事、日本文化政策学会理事、九州大学社会包摂デザイン・イニシアチブのアドバイザー。



堺アーツカウンシル令和4年度活動総括

令和4年度は、プログラム・ディレクター（PD）1名、プログラム・オフィサー（PO）5名の体制で、下記のとおり、堺市における文化芸術活動の相談、視察を通じた支援活動や、調査研究、情報発信を行った。

①相談

当年度の文化芸術活動に関する延べ相談件数は56件（前年度の実績は42件、前年度比33.3%増）で、初回の相談が26件、再来の相談が25件、初回・再来の区別が不明な相談が5件となっている。件数全体が増加しており、再来の割合が44.6%で、前年度の再来の割合（19.0%）を大きく上回っている。

56件のうち市内の活動の相談が47件（全体の83.9%）で、相談が多かった時期は前年度と同様に11月と12月で、11月下旬に行った補助金説明会のあとに相談が集中した。相談内容の分野としては、当年度、次年度含めて補助金の準備に関する相談が多かった。また、活動分野では音楽の相談が20件で前年度の実績（6件）に比べて大きく増加した。

②視察

当年度の文化芸術活動に関する延べ視察件数は50件（前年度の実績は41件、前年度比21.9%増）で、初回の訪問は21件、再訪が21件、初回・再訪の区別が不明な視察は8件となっている。

50件のうち、当年度の補助金に採択された活動の視察が22件となっている。公演や展覧会などの本番の視察が延べ42件（全体の84.0%）で、ヒアリングのために、本番以外の準備・リハーサル、練習、会議・打合せ等への視察も行った。

③調査研究

当年度の補助金採択事業の来場者・参加者に対するアンケート調査では1,744件（前年度887件、前年度比96.6%増）の回答があった。来場者・参加者の総合的な満足度で満足層は96.6%、堺ACの目的について肯定的な期待を寄せた回答が85.9%となっている。調査の結果から、来場者・参加者過半を高齢者が占めていることや、企画趣旨のうち「共生社会の推進」に対する理解の度合いが他の項目に比べて低くなっている。

③情報発信

地域で文化芸術活動をされている方のための勉強会を3回、交流会を2回実施し、延べ参加者数は60人となっている。

堺ACとしての事業の2年目となる令和4年度は、事業を開始した前年度に引き続き、相談・視察、調査研究、情報発信という活動を通じて、文化芸術に携わる人たちを支援し、文化芸術を活用した社会的課題の解決をめざす取組を実施した。前年度と比べた際に明らかとなった事業の結果（アウトプット）と成果（アウトカム）として、以下のような点を挙げる事ができる。

- 対前年度比で、**相談件数が33.3%、視察件数が21.9%の増加**となった。堺ACの2年目で、中間支援機能のベースである相談・視察が定着すると同時に、**相談の再来の割合が増えていることから、地域の文化芸術活動に携わる個人や団体との双方向、かつ継続的なコミュニケーションが活発化した。**
- 前年度に引き続き堺市文化芸術活動応援補助金に関する相談を積極的に受け入れた。**とくに補助金の申請に向けた企画内容の相談に対する悩みや、企画内容が具体化する前段階で持ち込まれるアイデアの相談について、**PD、POの専門性と経験を活かした丁寧な助言を行った。**
- 前年度に引き続き**地域の文化芸術活動の現場を直接訪問して視察を行うなど、堺ACから主体的・能動的に活動の実態を把握した。**相談の再来や視察の再訪により、コミュニケーションの双方向性が強まり、**「相談」と「視察」明確な区別が難しくなっているが、そうした状況こそが「伴走支援」の前段階とも言える。**
- アンケート調査では、前年度に比べて調査対象数が大幅に増加し、前年度と同水準で**補助金の採択事業の来場者・参加者の高い満足度**と、堺AC的に対する肯定的な期待を確認した。また、勉強会や交流会を通じて、**地域の文化芸術活動に携わる個人や団体との双方向の交流の機会を創出した。**

上記の成果は、令和3年2月に策定された「第2期堺文化芸術推進計画」の重点的施策1-1「文化芸術を通じた社会的課題の解決」、1-2「すべての人が文化芸術を享受できる機会の充実」、1-3「市民の文化芸術活動の機会の提供」に沿った活動の結果であり、堺アーツカウンシルの活動は重点的方向性1「文化芸術とともに生きる」への寄与が認められる。

中間支援組織として、市民の文化芸術活動をサポートし続けていくため、次年度以降も引き続き実績の推移や変化を測定し、成果や波及効果を把握しながら、堺市の文化芸術振興を着実に進めていきたい。

文化芸術活動に関する
相談

延べ56件

(対前年度+33.3%)

文化芸術活動の
視察

延べ50件

(対前年度+21.9%)

文化芸術を活用した
社会的課題の解決について

「ぜひやってほしい」
「まあやってほしい」

85.9%

文化芸術活動の情報発信
勉強会・交流会

延べ60人参加

堺市文化芸術活動応援補助金について

堺市文化芸術活動応援補助金とは

歴史ある堺の文化の良さを継承し、市民の文化活動の振興を図り、地域文化の創造に努め、また、文化芸術の力を活用して、子育て、教育、福祉、観光、都市の活性化等の幅広い分野における社会的課題の解決に資する事業の実施に要する経費を市が補助することにより、自由で心豊かな市民生活の実現及び都市魅力の創造に寄与することを目的として令和3年に創設した補助金です。

より効果的な事業実施をめざして、堺アーツカウンシルが申請時の事業の組み立てについての相談受付や視察、事業実施の際の伴走支援を行っています。

次頁から、堺アーツカウンシルが実際に視察した令和4年度採択事業の一部をご紹介します。

補助金の区分

区分	一般補助		特別補助		
	スタートアップ支援事業	地域文化力向上事業	市民文化活動推進事業	共生社会推進事業	舞台芸術創造発信事業
目的	地域文化力の向上		市内全域での文化力の向上、社会的課題の解決		
補助上限額	10万円	50万円	100万円	100万円	300万円
対象活動内容	地域における小規模な文化芸術活動	地域における文化芸術の現状を踏まえた地域一体となった事業	市民が身近に文化芸術に触れる機会を提供する事業	共生社会を推進するための社会包摂型事業	質の高い芸術文化に触れる機会を市民に提供し、市民満足度の向上及び都市魅力の創出に寄与する事業
補助率	補助対象経費の1/2以内				

令和4年度申請・採択件数

申請区分	一般補助		特別補助			合計
	スタートアップ支援事業	地域文化力向上事業	市民文化活動推進事業	共生社会推進事業	舞台芸術創造発信	
申請件数	9件	29件	8件	5件	4件	55件
採択件数	9件	17件	5件	2件	2件	35件
採択金額	763,000円	6,481,000円	4,710,000円	1,240,000円	4,633,000円	17,827,000円

令和4年度採択事業紹介

スタートアップ支援

音楽を保護者も子どもも楽しんで

事業者 ミュージックスクールふあん!ふあん!

事業名 赤ちゃん和妈妈パパを笑顔にする親子リトミックスクール

日程

令和4年4月27日(水)、5月18日(水)、6月15日(水)、7月6日(水)、7月30日(土)、8月3日(水)、8月24日(水)、9月7日(水)、9月21日(水)、10月7日(金)、10月19日(水)、11月2日(水)、11月16日(水)、12月7日(水)、12月17日(土)、令和5年1月7日(土)、1月18日(水)、2月15日(水)、2月28日(火)、3月3日(金)、3月14日(火)、3月17日(金)、3月30日(木)

会場

フェニーチェ堺 小スタジオB、さかいっこひろば



リトミックスクールでは、音楽以外にも手を使うワークも取り入れている。

概要

「コロナの中、しんどい思いを抱えながら子育てされている赤ちゃん和妈妈・パパに元気になっていただき、子育てが楽しくできるお手伝いがしたい」と、月に1~2回程度、リトミックスクールを開催。

プログラムは、生のピアノ伴奏での合唱、身近にあるひもやシール、楽器を使った体を動かすワーク、絵本の読み聞かせなどが展開される。また、忙しい育児のなかで少しでも保護者が自分自身に目を向けてほしいと、毎回テーマを決めて保護者同士が話す「プレゼンタイム」も設けている。参加者各回4~8人。

執筆者所感

まだ暑さの残る9月上旬に見学させていただきました。参加されていたのは、8か月~2歳の子どもと保護者の方、4組。アットホームな雰囲気できゅっくり始まっていくかと思いきや、たった1時間で様々なワークが次々と展開されていきます。「プレゼンタイム」では保護者同士の情報交換の場にもなっていると感じました。

なにより素晴らしいところが、主宰の石井智子さんの歌声とピアノ演奏です。みんなで歌うときは迫力のあるソプラノの声に気持ちよく先導されていき、ピアノ演奏の際はコンサートにいるようで、小さな子どもたちもマラカスを振りながら楽しそうに聞いていました。

ただ、有料イベントということもあり、広報については苦戦されていました。また、対象となる子どもたちは保育園や幼稚園に入ると平日の日中は参加が難しいため、リピーターが生まれにくいという事情があります。

「さかいっこひろば」での演奏会とうまく連携しながら、今後もミュージックスクールふあん!ふあん!でしか体験できない、リトミックのプログラムが続いていくことを期待します。(川那辺PO)

スタートアップ
支援

身体を整えダンス

事業者 マノ・フラメンコ

事業名 サスタナブル・フラメンコ

日程 令和5年1月9日(月)、2月23日(木)、2月24日(金)、3月18日(土)

会場 御池台地域会館、堺市立梅文化会館



自ら見本を見せる安地里恵さん

概要 フラメンコダンサーの柏麻美子さんが主催する、ボディケアとフラメンコ体験を織り交ぜた講座。柏さんは脊柱管狭窄症のため一時、ダンスを中断していたが、自身の身体をケアしながら活動を再開した経緯があり、その経験が本事業に繋がっている。ボディケア講座ではゲスト講師に安地里恵さんを招き、専門家の指導により個々人の身体の癖を見つけながら身体づくりの基礎を学ぶ。
参加費1,000円/回、参加者38人。

執筆者所感 令和5年2月24日(金)に堺市立梅文化会館で開催されたボディケア講座に参加しました。ほぼ定員の13名の参加者が揃い講座が始まると立ち方、バランスのとおり方から始まり、大きな動きは無いものの普段意識しない身体の仕組みを意識したり、無意識な身体の癖に気付くことに注意した身体の動きを行ったり、一見地味ながら身体に“効く”内容でした。文化芸術活動と並行して、あるいはそれ以前に、ダンスなどの身体活動に取り組むための、続けるためのボディケアを取り入れることは、長く、楽しく、無理なく続けるための講座としてユニークな視点です。身体の可動域を広げたり、柔軟になることは、並行して実施するフラメンコでの表現の幅を広げることに貢献しています。健康にも寄与する文化芸術活動として価値があるものです。(柿塚PO)

スタートアップ
支援

演奏する喜びを分かち合うために

事業者 Niji_no_Oto

事業名 管楽器とピアノによる「動物の謝肉祭(お話付き)」

日程 令和5年1月15日(日) 14:00~16:00

会場 フェニーチェ堺 小ホール



演奏に朗読と子どもたちの動物の絵が加わる

概要 フルート、クラリネット、サクソ、トランペット、ホルン、トロンボーン、チューバ、ピアノによるコンサート。第1部はサン＝サーンス「動物の謝肉祭」に、朗読を加えて演奏。第2部はオーケストラ曲で有名なヘンデル「水上の音楽からアラ・ホーンパイプ」、吹奏楽曲で人気の「さくらのうた」など。来場者120人。

執筆者所感 冬らしい寒さの日曜午後、フェニーチェ堺小ホールでの演奏会に伺いました。客席には小中学生の子どもたちがちらほら。ざわめきから、この演奏会を楽しみにしている様子が伝わってきます。

出演は、今回のためにアマチュア演奏家で構成されたアンサンブル。前半の「動物の謝肉祭」は、語り手が加わって「ふしぎな動物園」という音楽劇仕立てになっています。主人公が会会ういろいろな動物が、お話と音楽、子どもたちの絵で表現され、イメージが広がります。子どもたちも客席からグッと身を乗り出します。

後半は、近年、吹奏楽部の部員数が減っている現状に触れ、「小編成だとしても編曲版を見つければ、やりたい楽曲を演奏できる」というお話があり、オーケストラ曲から小編成で演奏されることが多い吹奏楽曲まで、様々な楽曲が演奏されました。

主催者によるMCでは、この演奏会はもともと室内楽曲である「動物の謝肉祭」をどうしてもお話付きで演奏したいという個人の想いから始まったという経緯が語られました。メンバーを集めるところからスタートし、実現したものだったということでした。

観客の感想には、学校や施設などで、今回の「動物の謝肉祭」をやって欲しいという声や、小編成で活動しているけれど、これからいろいろな曲に挑戦してみたいという声があったそうです。この試みが、また誰かの試みの後押しになることを感じられる事業でした。(宮浦PO)

夏休みの体験から文化活動へ

事業者 音楽デュオ葉月

事業名 第2弾 ひらけ!おとの世界—学んで・遊んで・楽しんで—

日程 令和4年7月17日(日)、7月24日(日)、8月28日(日)、9月11日(日)

会場 サンスクエア堺(堺市立勤労者総合福祉センター)、葉月ミュージック「ベルベヤ」



箏の体験の様子

概要 夏休みを利用した子どもの音楽体験事業。箏、ドラム、ハンドベルの3つの楽器を題材にそれぞれ伊藤雅由耶さん、村尾コージさん、音楽デュオ葉月+笠原知恵子さんという専門家の先生方が講師を務める。箏は2回、それ以外は1回の講座で楽器の触り方から短い曲の演奏までを体験。興味を持って希望すれば楽器を続けることができるようにデザインされている。午後の部は大人向けの講座としても開催。参加費(楽器借料、保険代含む)1,500円/回、参加者69人。

執筆者所感 連続2回の箏講座の2回目を見させていただきました。参加者のうち、お箏クラブに入っている小学生1名以外はこの機会に初めて箏を触ったそう。講師は小学校でも定期的に箏のクラスを持っているベテランの先生で、指導の仕方、子どもへの声かけ、見本の演奏のタイミングなどテンポよく進んでいき、少し理解が追いつかない子どもにはアシスタントの先生がフォローするなど参加者の進度に応じた配慮がされていました。そのためか2回の講座で当初予定していた2曲(さくらさくら、荒城の月)に加え3曲(さくらさくら上級版)の演奏まで到達しました。演奏に加え、お箏の仕組み、箏曲の歴史、音名などの楽典の講義、資料配布もあり、90分が2回の集中講座ながらお箏に親しむ最初の1歩を大きく、かつ楽しく体験できる事業であったと思います。(柿塚PO)

堺への想いがつまった時代劇映画、市民も参加

事業者 山口 雅和

事業名 堺市を舞台にした時代劇製作とそのためのワークショップ

日程 【ワークショップ】令和4年5月～2月 50回に及び 【本撮影】令和5年2月5日(日)～21日(火)
【WEB公開】令和5年3月14日(火) 【上映会】令和5年3月31日(金)

会場 【撮影】南宗寺、水野鍛錬所ほか 【ワークショップ、上映会】蒼天シアター



小道具の刀が展示された上映会場は秘密基地のよう

概要 堺を舞台にしたオリジナル時代劇映画「SAKAI～約束の地へ」を製作するために、堺市民を中心としたワークショップを開催し、製作した映画の上映会を開催。堺の寺や鍛錬所、市民の協力も得て、戦国時代の堺を描いた。上映会参加者81人。

執筆者所感 阪堺電車の綾ノ町駅すぐの小さな商店街。道幅が狭く昭和の雰囲気が漂っています。商店街のなかに電車の踏切があるのも趣深く、観客らしき人たちが数人待っていました。「蒼天シアター」は商店街に面した古い商店を改装した建物。中に入ると、迷路のような空間で秘密基地のような遊び心を感じました。20数人も入れば満席の上映会場は、古びた木材の壁に小道具の刀が一面に展示され、天井には大きな木の梁などが見え、とてもユニークな空間です。この日の上映会は各回満席となり最後は立ち見まであったそうです。映画は殺陣のシーンが多いのですが、戦乱の世にあって、堺の商人たちが戦いよりも泰平な街、自治都市をつくりあげることが大切にしてきたことがメッセージとして伝わってきます。堺が平和を体現する街として描かれているのが印象的でした。映画は35分ほどで、上映後は俳優兼プロデューサーが撮影のからくりや苦労したエピソードを話し、いっそう映画を楽しめる上映会でした。

堺アーツカウンシルでは申請段階から相談を受けて、活動を見守ってきました。製作中はコロナ禍の影響が大きく、関係者に新型コロナウイルス感染者が発生し撮影が遅れるも、市民が熱心にワークショップに参加し、撮影に協力されました。そうした想いの後押しもあって、あきらめずに完成した映画だと感じました。今後の上映活動にも尽力され、多くの方に見ていただきたいと思います。(上田PD)

文化芸術活動が、健康増進、体力向上にも

事業者 おおとり狂言之会
事業名 古典伝統芸能の狂言を楽しもう!

日程 令和5年2月11日(土) 13:00-16:00

会場 堺能楽会館



能舞台上で衣装をつけて演じる

概要 シニアのメンバーで構成される狂言サークルによる狂言と小舞の公演。来場者約80人。

執筆者 所感

2月の少し寒さの和らいだ土曜日、堺駅から徒歩10分ほどの場所にある堺能楽会館での「第18回狂言之会」に伺いました。

狂言を学ぶシニアの方々を中心に構成される「おおとり狂言之会」が、地域住民にも狂言に親しんでもらうおうと開催している会です。

地域で配布されていたチラシには曲目名しか記載されていないのですが、受付で配布されたプログラム冊子を拝見すると、各曲目のあらすじと簡単な解説があり、興味が湧いてきます。

「面白いところも、失敗も笑ってください」という講師による開演の挨拶に続いて、公演が始まります。狂言は、古今東西変わらない人間の滑稽さや弱さに焦点があたった喜劇であり、また口語体の台詞、大げさな仕草や声色が理解を容易にするので、客席からはすぐに笑いが起こります。さらに、舞台上で、台詞が飛んでしまうメンバーに、役柄上は対立しているはずの相方が、小声で台詞を教えてあげたりして、それがまた新たな笑いを誘います。

メンバーは全員60歳以上とのことですが、20分ほどの台詞と動きを頭にいれ、衣装をつけて演じるのは、身体的にもなかなかハードな活動と感じました。文化芸術活動というだけでなく、特にシニアの方々にとっては、健康増進、体力向上に資する面もあるだろうと実感する公演でした。(宮浦PO)

古典写真技法の価値を共有したい

事業者 若林久未来 (若林富美子)
事業名 ミュシャの生きた時代の写真術 ~Classical Photograph®の魅力~ 主催:若林久未来

日程 令和4年12月7日(水)~12月18日(日)(内11日間)

会場 堺市立文化館(つつじ全室)



様々な古典写真技法を用いた作品とそれを生み出す装置が並ぶ

概要 12名の作家たちによる様々な古典写真技法を用いた作品展並びに、暗室、カメラ、技法の解説の展示トークの開催。入場者80人。

執筆者 所感

12月上旬の日曜の午後、堺市立文化館が会場の「ミュシャの生きた時代の写真術~ Classical Photograph®の魅力~ 主催:若林久未来」へ。様々な古典写真技法で作品制作する作家たちの展覧会です。展覧会タイトルは、同館に堺 アルフォンス・ミュシャ館が併設されており、19世紀から20世紀にかけてのミュシャが生きた時期と、写真技術が数多く開発された時期とが重なることから来ています。「ヴァンダイクブラウンプリント」、「湿版写真」、「タゲレオタイプ」など、撮影、プリントに技術と手間を必要とする技法で生み出される作品は、写真とひとくくりにはできない奥行きや存在感を感じ、じっと見入ってしまいます。また、暗室やカメラの展示、出展者からの技法の解説によって、現代のデジタル写真との違いがより明確になり、写真という技法を用いて作品をつくることのイメージも変わっていきます。懐古ということではなく、現代だからこそ見えてくる価値を多くの人と共有したいという思いが伝わってくる事業でした。(宮浦PO)

古典写真技法と茶の湯文化の出会い

事業者 山本 柱

事業名 茶室における和紙文化～湊紙を用いた写真表現～

日程

【展示】令和4年12月10日(土)～12月13日(火) 【茶会】令和4年12月10日(土)～12月11日(日)
【普及促進(SNS)】令和4年12月4日(日)～12月31日(土)

会場

さかい利晶の杜／三千家茶室



茶室空間全体を生かした展示

概要

展示：古典写真技法を用いた写真と堺発祥の和紙である湊紙を組み合わせ茶室空間に配したインスタレーション作品を展示する。入場者88人。

茶会：作品空間の中で湊紙を懐紙に用いて茶を振る舞う。参加者20人。

執筆者
所感

12月上旬の日曜の午後、さかい利晶の杜、三千家茶室が会場の「侘び寂び(わびさび)展」へ。堺発祥とされる、漉き返しの和紙(再生紙)「湊紙」に注目し、それが使われてきた茶室空間において、和紙を用いた写真作品を展示する企画です。写真のテーマは、主催者がかつて陸路で旅したシルクロード。三つの茶室が連なる大広間の周囲に巻物が広げられており、旅路に沿って移り変わる風景が順にプリントされています。移動しながら観ていくと、まるで小さな旅をしているようです。床の間には、旅で入手したという古代ガラス器の写真が掛軸に表装され掛けられています。写真は湊紙に鶏卵を塗った印画紙に紫外線で露光するという古典技法を用いたもの。趣向にも茶室にもじっくりと馴染みます。この日は、和服の主催者による抹茶の振る舞いもあり、旅のお話も丁寧にしてくださいました。旅人であり写真家である主催者が亭主を務める、一風変わった茶会に招かれたような鑑賞体験でした。実際、茶道関係者から、茶事にも使いたいような道具仕立てになっているという感想もあったそうです。

古典写真というそれほどメジャーではない分野で活動していく上で、堺の文化資源のひとつである茶の湯と掛け合わせ、表現と出会いの可能性を広げるアイデアは、同じような条件で活動している人々のヒントになるのではないかと思います。(宮浦PO)

平安時代も現在もコミュニケーションのきっかけをつくる文化芸術

事業者 なごみ企画

事業名 与謝野晶子没後80年記念 与謝野晶子と西陣美術織による源氏物語54帖

日程

【展示会、ワークショップ・講演】令和4年5月7日(土)～8日(日)

会場

さかい利晶の杜 企画展示室・茶室・講座室



席主がお香をたいて、参加者は順番に回ってくる香りを聞く源氏香遊び

概要

展示会：堺と深い縁を持つ西陣織で織り上げた54帖の西陣美術織。鑑賞者220人

ワークショップ・講演：源氏香の体験・組香(香あそび)・匂い袋作り・季節の紐結び作り、源氏香に関連した「着物」、「雑貨」、「お菓子」などを紹介。堺市民の希望者で構成されたさかい利晶の杜朗読サークルによる与謝野晶子訳「源氏物語」の朗読劇。参加者187人、朗読劇生配信視聴100人。

執筆者
所感

新緑の美しい5月晴れの日、さかい利晶の杜は賑わい、着物姿で訪れる方もいて華やかな雰囲気です。会場では与謝野晶子も翻訳をした源氏物語の西陣織物や着物や帯などが展示され、匂い袋のワークショップや朗読劇などの企画が行われています。

ガラスの自動扉が開いて、石畳にそって歩くと、源氏香遊びの茶室に招き入れられました。正座の難しい方には椅子が用意されています。最初に源氏香遊びの説明がありました。茶の湯では床の間に花を活けませんが、源氏香でお香の香りに集中するため花を活けません。その代わりに、参加者の前には絹の紐で季節の花や蝶が複雑な形で結ばれています。源氏香は香りを当てる、嗅覚の能力を競うのが目的ではなく、源氏物語をきっかけにコミュニケーションを深める場だということです。源氏物語はドラマチックな物語です。さまざまなモチーフから思い出話に花が咲いたり、さまざまな考え方に触れる場でもあるのです。参加した12人全員とも香りを当てることはできませんでしたが、気さくな先生に質問が止まらず、知識欲が刺激されたことは間違いありません。

朗読劇はさかい利晶の杜の朗読サークルのメンバーによるもので、演劇的で声による源氏物語は読書とは異なる体験となりました。

主催者はにこやかに参加者を迎え、受付を担当する高校生の二人は参加者とのやりとりを楽しんでいる様子でした。コロナ禍で人と人の語らいや出会いが制限されたけれど、その日常のなかでもきっかけとなる場づくりや仕掛けの大切さを源氏物語と与謝野晶子を通して感じた二日間でした。(上田PD)

堺で創作、発信する総合芸術

事業者 堺シティオペラ一般社団法人

事業名 第37回定期公演オペラ「愛の妙薬」

日程 令和5年1月14日(土)、1月15日(日)

会場 フェニーチェ堺 大ホール



公演の実際の場面から

概要 堺市のプロフェッショナルなオペラ団体である堺シティオペラによる定期公演。堺市の中枢文化施設であるフェニーチェ堺にて、同じく堺に拠点を置く、大阪交響楽団がピットに入った。

ガエターノ・ドニゼッティ：オペラ「愛の妙薬」

指揮 柴田真郁

演出 岩田達宗

演奏 大阪交響楽団

合唱 堺シティオペラ記念合唱団

合唱指揮 岩城拓也

制作統括 坂口茉里

入場料3,000円～ 15,000円 観客1087人。

執筆者 所感

2日間公演のうち初日を聴きました。開場中には演出の岩田達宗氏によるプレトーク。この後、上演されるオペラが如何に日常の我々と同じ様な人物とその感情で構成されているか、という内容で作品の理解と親しみやすさに貢献していました。ロビーでは物販の他にリハーサル時や通し稽古の舞台写真が展示され、本公演が所謂“買取公演”でなく、主催者により制作されていることを来場者が理解できるようになっています。内容はプロの団体として十分な水準であり、ゲストの歌手、定期的に関西在住の歌手のバランスもよく、また自前の合唱団も高いレベルで重要な役割を果たしていました。村の野外劇場を模した舞台もシンプルで鑑賞の邪魔をしません。字幕やセリフでは日本語（関西弁）を混ぜ、作品の持つ喜劇性の範囲でノリや笑いも取り入れ、地元の劇場で芝居を見る楽しさも程よく効いています。来場者も多く、客席の反応もよく定期的に来場する固定のファンを獲得しているようです。（柿塚PO）

文化芸術活動に関する相談・視察

文化芸術活動に関する相談・対話

文化芸術活動や補助金・助成金等に関するお困りごとについて、対面、電話、メールなどで相談・対話の機会を設けました。

<内訳>

○一般相談・堺市文化芸術活動応援補助金に関する相談の別（件）

一般	40
補助金	16
合計	56

○活動分野別（件）

音楽	20
美術	4
演劇	5
舞踊	2
伝統芸能	1
メディア芸術	3
文学	1
書道	1
その他	16
不明	3
合計	56

相談事例

ご相談

書道の公募展を開催するのですが、作品が集まりません。

ACからのアドバイス

多様な方の参加を希望されていまして、「障害者施設でワークショップをして、その作品を展示させてもらうのはどうでしょうか」とご提案しました。書の取組をされたことのある施設の方に堺アーツカウンシルから企画内容をお伝えし、受け入れていただけることになりました。3回のワークショップを実施し、それぞれの個性をいかした書の作品が仕上がりました。展覧会には施設の方々も揃っていらっしゃいました。

ご相談

前回の堺市文化芸術活動応援補助金は不採択でした。今年も舞台での公演を申請したいのですが、計画をどのように立てたらいいですか。

ACからのアドバイス

事業の目的を明確にすること、日頃の練習の成果を見せる単なる発表会と判断されないように、鑑賞者にどのようなアプローチを行うのか、市民へのリーチをどのように工夫するのかなど、具体的に計画のなかに落とし込むことを提案しました。

ご相談

堺市文化芸術活動応援補助金に申請をしたいのですが、申請書を書いたことがありません。

ACからのアドバイス

申請書の記入例を見ながらご説明しました。補助対象経費については、現在想定している費用を書き出してもらい、対象になるかならないかを個別に確認しました。その後、項目ごとに話しながら、申請書の作成をお手伝いしました。事業の目的を明確にして、事業の流れを時系列で再確認する機会となりました。

ご相談

障害のある子どもたちを対象としたプログラムに関わっています。障害のある子どもも一緒になって楽しむことをめざしていますが、実際は障害のある子どもたちのみの参加です。障害のある人、ない人が音楽を通して交流することができる事業を実施したいのですが、補助対象になりますか。

ACからのアドバイス

障害のある人とない人が交流する事業を実施するには、集客の工夫や場をファシリテーションするスキルも必要です。まずは実践者を講師に迎えたり、すでに経験やノウハウがある人との協働を考えるなど、ステップを踏んで、段階的に実現していくことを提案しました。補助金の申請締切日が近かったことから、今年度は小さくても試行的に実施し、その状況を踏まえて次年度ぜひ応募して欲しいと伝えました。

文化芸術活動の視察・訪問

○視察・訪問件数：50件

堺市文化芸術活動応援補助金の採択事業の視察に伺いました。現場に伺うと、計画書や報告書には書ききれない状況や想いに触れます。実際に事業実施の現場に立ち会うことで対話生まれ、相談や伴走支援につながることもあります。事業の進捗を伺うなかで心配事や関心事をお聞きしたり、参考資料をお渡しするなど、それぞれの活動に合わせたコミュニケーションを心がけています。

また採択事業だけでなく、不採択の事業や市内で先駆的に取り組まれている文化芸術事業、堺市内で文化芸術活動と協働したい企業・他分野の方もお訪ねしました。顔を覚えてもらう機会生まれ、公演や展覧会、ギャラリーなどで偶然にお会いすることも増え、意見交換をしながら、新しいアイデアやネットワークが生まれました。

堺市では、令和3年に「第2期堺文化芸術推進計画」を策定し、「文化芸術を通じた社会的課題の解決」を重点的施策に掲げています。その一つとして、まずは文化施設の担当者のスキルの底上げが必要という考えから、堺市の文化施設に所属する企画担当職員等を対象とした座学・実践の研修事業を実施しました。

令和4年度は座学や体験を通じ、最終的には3チームに分かれオリジナルプログラムを考え、お互いに参加し合うシミュレーションを行いました。

実施期間：令和4年7月～令和5年3月までの月1回

会場：フェニーチェ堺

参加者：延べ65名

講師：上田(PD)、中脇(PO)、常盤成紀(堺市文化振興財団)、中川圭永子(俳優、10月～3月)



●7月～9月 まずは「社会包摂とは何か」「ワークショップとは何か」といった定義から、次にそれを支えるプログラムの基本構造(チェックイン、アイスブレイク、アクティビティ、チェックアウト)を理解し、最終的には体験したワークショップをふりかえり、基本構造をもとに分析できることをめざしました。まずは社会包摂が大切にする「誰もが参加・表現・選択できる権利と機会がある」ことが具体的にどのような状態なのかを知り、それを実践するワークショップは教室や体験講座と何が違うのかを学びました。

この研修プログラム自体もワークショップ形式で進め、3回目では上田PDによる合作俳句ワークショップを実践し、「自己紹介に創作のワークを加えることで、俳句を作る雰囲気作りを感じました。このような作り込み方をしていくんだなぁと体感・実感することができました」、「節々の言葉遣いが参加者の気持ちや行動に影響し、ファシリテーターが参加者と共に作っていくのがワークショップなのだと感じました」といったように、プログラムデザインとその進行の相互作用、また参加者の状態をいかに把握しながら場を作っていくのか、を体感する機会となりました。

●10月、11月 コーディネーターの実践のために、実際の依頼内容をもとに架空のクライアントを設け、ヒアリングのロールプレイを行い、講師をアーティストに見立てプログラムの設計を体験学習しました。

一方で「文化芸術を通じての社会包摂」を“やってあげる”といった「与える(援助する)」活動と誤解しないように、視覚障害を持った俳優の中川圭永子さんをゲスト講師に招き、場への影響力、可能性を体験してもらいました。社会包摂を意識したコーディネーターという立場になった場合、依頼者の課題感やアーティストの得意分野など、双方を理解し、翻訳するふるまいが求められます。「依頼者へのヒアリングでは実際聞きたいところは課題と感じているところで、普通に聞いただけはなかなか出てこないんだなと思いました」、「自分自身でアイスブレイクを考えて実際にやってみると、いかに言葉選びや手順に気を配っているかを実感しました。場をホールドし続ける事は、想像以上に神経を使うことなんですね」といったように、プロセスに関する理解を深めることができました。

●12月～3月 10月、11月での架空のクライアントの依頼案件に対し、講師をアーティストに見立てた3チームが考案したワークショップをお互いに提供・体験し合いました。現場さながらの動きを体験するだけでなく、同じ案件でもアーティストが変われば、もしくは依頼内容の解釈に応じて、いかにアウトプット(プログラム)が変わるのか、を実感することも狙いがありました。「企画の立ち上げから実施まで、コーディネーターがアーティストにどこまで介入して良いのか迷いました。失礼のないように、と引いてしまった部分もありました」、「実際にやってみると、全体として“つぎはぎ感”があり、アクティビティのつながりが無かったように感じました。もっと積極的に、コーディネーター側からアーティストの意図を汲むようなコミュニケーションを持てば、筋の通った企画になったのではと思いました」。

これらの声に代表されるように一連の研修を通じ、ワークショップや社会包摂の理解を深めるだけでなく、コーディネーターとして実践していく難しさや課題が顕在化されたことも成果でした。

堺市で文化芸術活動をされている方、文化芸術活動に興味がある方等を対象に、各テーマについての知識を深め、情報交換をしていただく機会とすることを目的として、堺AC主催の勉強会「地域でのアート活動を学ぶ勉強会」を3回開催しました。

本勉強会では、ゲストの講師の方のプレゼンテーションを受けて、中脇POが随時疑問点や詳しく知りたいポイントを掘り下げる、という方法で進行了しました。

●第1回

テーマ 活動のつなげかた・ひろげかた

日程 6月27日(月) 18時30分～20時30分

会場 フェニーチェ堺

講師 常盤成紀(アミーキティア管弦楽団)

参加者 24人

内容 催し物を企画しても新しいお客さんと出会えないという悩みをよく聞きます。アマチュアオーケストラ、アミーキティア管弦楽団の主宰で堺市文化振興財団職員でもある常盤成紀さんは楽団の特徴や強みや弱みをみつけながら活動を続けました。その場所、その人たちとしかできない企画をするようになり、演奏にも新しい発見が生まれ、活動の幅が広がりました。勉強会の参加者にとっては、関わるメンバーの得意なことやメンバーの置かれている状況を共有し、どのような活動をするのか、などを改めて考える機会になりました。堺市内ではこうした社会包摂的なアプローチをする音楽活動は多くないなか、事例を紹介することで参加者は新たな視点を持つきっかけとなりました。



●第2回

テーマ 集まる場から作る仲間の増やしかた

日程 8月31日(水) 15:00～17:00

会場 東文化会館

講師 宝楽陸寛(泉北ラボ代表理事、NPO法人SEIN事務局長)

参加者 8人

内容 活動を続けていくと誰もが直面する課題「仲間づくり」をテーマに、組織のコアメンバー、ボランティア、協働相手など、新しい仲間に出会うためのヒントとなるよう、市民参加のまちづくりコーディネーターの宝楽陸寛さんの事例から学びました。文化芸術のコミュニティにこだわらずスポーツや子育てなど他の分野の人たちと出会える場に出向いたり、自らの活動がそういった出会いの場となるよう内容や広報を工夫することも大切です。講師の宝楽さんの熱量に参加者はエネルギーを充填し、ステークホルダーを巻き込んで活動する事例が堺市内にあることを知り、自らのコミュニティのもう一回り外を見渡す機会になりました。

●第3回

テーマ 自分のための活動の振り返りかた

日程 3月6日(月) 10時30分～正午

会場 堺市職員能力開発センター

講師 大澤PO

参加者 11人

内容 振り返りとは計画して実行して確認して改善し、また計画するというサイクルの「確認」にあたる大澤寛雄さんは話します。次の計画に活かすためには「いつ」、「誰と」、「どのように」振り返るかによって、確認できる内容も変わります。また、具体的な振り返りのアイデアが提案されました。活動することで精一杯になりがちなのが多いなか、落ち着いて振り返ることでより良い活動につながることを理解いただいたと思います。後半のグループ毎のフリートークでは、活動や広報の悩みを参加者同士が熱心に話し合いました。堺市内で活動しているけれど異なるジャンルの人たちが同じテーブルで話をすることはありそうではなく、ピアレビューの状況が生まれました。素直に聞きあえるのは、お互い活動しているからこそ。参加者同士、励まし合い、刺激し合う時間となりました。



第1回
テーマ 地域とアート、他分野連携、共生社会
日程 7月27日(水) 14時~15時30分
会場 西区役所 地下1階会議室
参加者 10人

内容 堺市内でさまざまな活動をされている方同士が出会い、つながる場として「さかいとあーと井戸端かいぎ」を令和4年度から開催しています。

7月は3つのテーブルに分かれて参加者同士で語り合っていました。伝統芸能の教室を運営している方はこれまでの活動を振り返り、いろんな迷いや葛藤などもあるが、今は他ジャンルとのコラボレーションにチャレンジしてみたいと話していました。また、他のテーブルでは活動に人をどう巻き込んでいくかという質問があり、「できるだけ自分以外の人に仕事を任せ、自分にしかできないことは何か常に考えている」と話している方がいました。

9月は「〇〇×アート」のテーマについて話をしました。冒頭から「福祉×アート」、「子ども×アート」、「食×アート」といったさまざまな掛け合わせの言葉が出てきて、「これからは市民×アートだ!」、「身近なところで、根付いていくアートを展開できたらいいね!」と、話が盛り上がりしました。

参加者からは「市内でアートのことを何でも話そうという場はありそうでなかった」という感想をいただきました。また、話すことで考えが整理されたのか「スッキリした」と言って会場を後にする方もいらっしゃいました。

「さかいとあーと井戸端かいぎ」は、平日開催のため参加人数が少ないことが課題ではありますが、堺で活動されている方々のお話を伺う貴重な機会であるだけでなく、交流会をきっかけとして参加者同士が連絡先を交換される等、アートのジャンルを超えた参加者同士の情報交換の場になっています。交流会後の個別相談もお申し込みがあるため、今後も堺市内の文化施設等を回りながら実施していきたいと考えています。

(川那辺PO)



第2回
テーマ 〇〇×アート
日程 9月15日(木) 14時~15時30分
会場 堺市立梅文化会館 第1会議室
参加者 6人

広報

●公式ホームページ(堺市ホームページ内)

堺ACが実施するイベントや活動報告についてのお知らせを随時更新しています。



堺市ホームページ

●ニュースレターの発行

堺ACの日々の活動を市民の皆さんに知っていただくことを目的に、「堺アートカウンシルニュースレター」を計7回(vol.1~7)発行しました。

「地域でのアート活動を学ぶ勉強会」や「さかいとあーと井戸端かいぎ」の開催レポート、補助金採択事業の視察レポート等を掲載しています。

ニュースレターは、ホームページに掲載したほか、各文化会館、図書館等への配架も行いました。



●公式SNS

オンラインでの情報発信を強化するために、公式SNSを開発しました。堺ACの活動紹介、補助金採択事業の開催情報、文化課主催のイベントの情報等を発信しています。



設立2年目となる令和4年度の堺アートカウンシルの活動について振り返りました。



プログラム・ディレクター (PD) 上田 假奈代
 プログラム・オフィサー (PO) 大澤 寅雄
 柿塚 拓真
 川那辺 香乃
 中脇 健児
 宮浦 宜子

大澤PO: 令和4年度の堺アートカウンシル(以下「堺AC」)の活動を、まずプログラム・ディレクター(以下「PD」)、プログラム・オフィサー(以下「PO」)の皆さんそれぞれ振り返っていただきたいと思いますが、令和4年度の抱負とか目標がそれぞれあったと思いますが、それを踏まえて実際はどのような活動になったのか個々で総括しましょうか。

中脇PO: 僕は主に堺ACと公益財団法人堺市文化振興財団がモデル事業として実施した文化会館の企画担当者等に向けたアウトリーチや社会包摂型事業についての研修を月に1回やってきました。昨年度の取組を踏まえて、市民の皆さんに直接接する文化施設の職員の知識や能力向上の重要性を改めて実感しました。今年度の研修では理解が難しい社会包摂について、上田PDのワークショップや視覚障害の俳優の方に講師をしてもらい、頭の中のイメージだけではなく、質感を伴って理解してもらえた気がします。アートカウンシルが直接市民と関わることが重要な一方で、中間支援組織として文化会館のスタッフにアプローチするというのは全国的にも珍しく、モデルになる可能性があります。また財団から紹介を受けて、福祉分野の方が堺ACの勉強会に来ていただくなど、そこで課題を共有できたこともありました。



宮浦PO 昨年度感じたのは、堺ACがまだまだ市民に認知されていないということ。なので今年度は情報発信の強化が抱負でした。具体的にはホームページの再編集、視察した事業の紹介や勉強会の

内容を伝えるニュースレターの発行、それらの配架やSNSでの拡散。堺ACそのものの発信というより我々が把握している市内の活動の紹介を中心に。その結果、少しずつ堺ACが何なのか、何ができるのかが伝わってきている印象です。

柿塚PO 補助金申請者から、その方たちが今までやってきた活動と堺市の掲げている社会包摂を目的にした事業とどうやったら整合性を取れるのだろうかと相談をされました。自分でもそこは難しい部分だと思っているので、割と丁寧に話を聞いたことが複数ありました。それを受けて改めて提出された申請書を確認すると、申請するのは一般の公演なんだけれども、団体全体の運営方針とか日頃の活動で、社会包摂的な視点を入れていく、それが将来的には公演にも影響していくのではないかと読み取れるもののがいくつかあり、今後よい事業になっていくのではと期待が持てました。

川那辺PO 私はできるだけ市民の皆さんと直接話せる機会を作りたいと考えていました。令和4年度は堺AC主催の勉強会である「地域でのアート活動を学ぶ勉強会」と同じく堺AC主催の交流会である「さかいとあーと井戸端かいぎ」を担当し、そこで参加者と交流できたり、事業視察も回数が増えて、個別に補助金採択団体の方とお話する機会を昨年度より作ることができました。やはり市民の皆さんの中には、堺ACは「よそ者」と思っている人もいるんじゃないかと想像していました。実際、そのような方が勉強会



に一度来られて、交流会にも参加されたんですが、その時に堺ACがどんな目的で設立された組織なのかをじっくりとお話し、最終的には「応援する」と言ってくださいました。そのことは素直に嬉しいし、勉強会や交流会が気軽に自分の思っていることを話せる場所として認識されたのかなと思います。ただ令和4年度は勉強会3回、交流会2回と実施回数が少なかったの、次年度は回数を増やして交流できる機会をもっと作りたいです。また、視察や伴走支援でお会いする機会があれば具体的な悩みごとを聞くことができ、それを受けて提案もできます。例えば、充実した事業をしている団体でも、視察にお伺いすると、「今後、自分たちの活動をどうやって広げていけばいいのか考えるために、今回の事業にどのような波及効果があったか把握したい。でもそれは自分たちだけでは難しい」という話をされました。そこで補助金申請の際に事業費だけでなく調査・研究のための費用も申請できますよ、と提案しました。直接お話を聞かないとどんな悩みがあるのか、解決策が提案できるかも分からないから今後もこうした機会を大事にしていきたいです。

大澤PO 私は調査研究を担当しており、昨年度は調査の設計と調査結果の取りまとめを、今年度はその昨年度の調査結果のデータを再分析しました。例えばその地域毎や年代に焦点を当てて、堺の文化活動の特徴



や課題を掘り下げました。そうした調査研究を2年3年と続けていくと、経年での推移から課題や成果がよりクリアになっていく。今年はこれから令和4年度事業の分析をして、令和3年度の結果と比べて4年度はどうだったかということ把握する年になります。それと今回、勉強会のために初めて堺市で文化芸術活動に取り組む方と対面でお話し、この地域の生の声を初めて聞いた。皆さんの文化芸術活動に対する熱意もよくわかるし、それをどうという方向にこれから堺ACとして押し上げていくかが、調査研究で扱うデータとは違うところで腹に落ちた。しっかり応援しなければいけないし、そのこ

との意味を一般的にも分かる形にしたいなということとを改めて思ったところです。

上田PO 最初に中脇POが話してくれたモデル事業は、かなり面白い取組なんじゃないかなと思います。直接市民の皆さんに働きかけるだけでなく、日々市民の方と向き合っている文化会館の職員さんの底上げも市民の芸術活動を振興、応援することの方法の一つだと思います。毎月職員さんたちに会って、一緒に環境をつくりながら、彼らの仕事が進むように、広がるように、そこから仲間が増えていることを感じました。同時に、職員さんにとって、堺市内に仲間がいて、悩んだら相談できる人がいる、あの人も頑張っているなということが見えた。確実に手応えとしてありました。今は2年間の事業なので、これを1年間に凝縮できたらもっと多くの職員さんに受けてもらえるので、そうなるといいなと思います。ニュースレターの発行は誰かと話をするとときに名刺代わりに堺ACの活動を紹介できるようになって、とても説得力が出るようになった。井戸端かいぎは違う分野でも何か文化芸術活動をしながらから生きている人が寄り合って話すことはやっぱりいいなと思います。個別に視察に行きます、相談に行きますというのが難しいときでも、交流の場を設定するのは中間支援組織としての堺ACができることの一つですね。また相談を受けている中で、活動の担い手の高齢化の悩みがあります。思い切って活動を縮小する、終わりにすることもよぎります。そんな時に例えば、活動記録を残すなど、良い“終り方”への並走も必要な状況なのかなとも思います。

大澤PO ではここからは、令和3年度、4年度に活動して、現在でも課題となっていること、難しいと思うところ、これからの活動の焦点として意識したいことを共有してみましょう。

中脇PO 僕は視察に行くことは少なく、勉強会で市民の方と接することが多いのですが、未だに薄い壁を感じる時があります。ちょっとずつ薄まっているんだけど、川那辺POとか宮浦POがやっている細かい交流、長い付き合い方は大事。でもそこにもジレンマがあって、そのような交流は数が少なくなる、公の機関でありながら一度にたくさんの人

を対象にするのは難しい。個々の信頼関係を深めることとすそ野を広げる活動の両立が難しい。

宮浦PO 伴走支援や視察には確かな手応えがあります。活動をきちんと見たうえで事業者のことも尊重して同じ目線に立てる。そういうコミュニケーションをできるのが対面の良さだと思うんですね。文書では伝えにくいことを、丁寧に伝えられるというのは対面ならではの。ただ、月に3、4日の非常勤という仕事の仕方のなかで、対面のコミュニケーションをどのように増やしていくのかは悩ましいですね。制約を何とか打開するやり方を考えていきたいなというのは思いますよね。

柿塚PO 明らかなのは補助金の共生社会での申請件数が少ないことですね。だから共生社会とか社会包摂という言葉は変えないけど、もう少し柔らかく、考えてもらう方がいいのかなと。どうしても色が見えないというか、ちょっと無味乾燥というか。“全ての人を取りこぼさない”的な話は伝わりにくいかもしれないと思っていて。仲間を増やしていくぐらいの感覚で取り組めないかなと思います。



中脇PO 活動している人たちのほとんどが自分たちの活動を伝えたいとか、やりたいことをやりたいと思って活動する。だから社会のための、誰かのための活動を求めることは難しいという課題がある。けれど自分の周辺に切実な事例があったり、実際の経験があったりすれば、共生社会が重要だ、となり応募する。だから共生社会そのものがハードルを上げているというより、それを市民側から取り組みたい人に補助金の情報が届いていないのかもしれない。

宮浦PO 堺市の文化政策の中でもキーとなる社会包摂と繋がりの深い共生社会に申請が少ないことは真摯に受け止めなければいけない。活用しうる人に情報が届いていないのかも知れないというのが一つ。別の視点で見れば、活動団体がまだその

段階には至っていない、という可能性もある。勉強会に参加してみる、スタートアップ支援に申請し、地域文化力向上にステップアップし、最終的に共生社会にまで視野を広げるような、成長の可能性を見据えたいなとも思います。別の可能性として、福祉分野に積極的にアプローチするというのはあると思います。社会福祉協議会の方から子ども食堂の動きが出たときに相談窓口をつくったことで、ほぼ全ての子ども食堂とのネットワークができたという話を聞きました。子ども食堂と共生社会の対象になるような事業とは親和性は高いはず。文化芸術側からでは出会えない、ニーズのある人たちに出会える可能性はあるかもしれません。

上田PO 私は貧困地域での活動が長いのですが、やはりこの補助金制度での共生社会事業は制度として難しい。受益者が貧困者の場合、収入がないのに事業費を補助金以外で半分負担しなければいけないというのは、芸術側が担うのはとても難しい。だから福祉的な活動をしている人たちがプラスして文化芸術が必要だ、アーティストが必要だと思ったときに、やっとこの制度を利用できるのでは。一方で福祉分野の人たちがアーティストを知っているか、マネジメントできるかという難しい。だから福祉と文化芸術団体をマッチングするのが一番いいんだけど、文化芸術側もそこまで踏み込めてない、やり方を知らないということが今の状況だと思う。現在、財団が子ども食堂での事業を進めているので、今後、子ども食堂を担っている人たちの間で文化芸術の需要、可能性が広がると思う。そのときがチャンスで、その時にちょっとでも興味を持っている人、やってみたい人を繋ぐことができるかもしれない。

川那辺PO 共生社会や社会包摂ということを経験のテーマにするのはあり得るなと思っていて。来年度からは共生社会事業の申請が少ないことに対してのフォローアップとして、その言葉を市民の皆さんと一緒に考える機会を作りたいなと思いました。

大澤PO では今の川那辺POの発言から、来年度をめざしてどういうことをやっていこうかという話に移りましょうか。

柿塚PO これまでの話と変わるんだけど、やりたいことをやるってということも応援したいですね。でも社会を意識しないものも全部だめにはしたくない。補助金の審査には携わりませんが、音楽的に挑戦していたり、高い水準をめざそうとしているものも、評価されるといいなと思います。

宮浦PO 私は情報発信を担当しているということもあり、まず必要な人に情報が届いていないということだけではなくていきたい。また、社会包摂と親和性が高いのはやはり福祉分野。福祉の領域で活動する方々に堺ACとしてできることは何かと言うことを伝えて、文化芸術との橋渡しをするということを情報発信や相談業務などを通して、実現していけたらと思います。



中脇PO 僕はファシリテーションとか、相互のやり取りのノウハウは持っているけれど、個々のジャンルに一步踏み込んでいくと、僕よりも他のPD、POの方が、本分の領域になっていくと思ってるので、次年度は他のPD、POと一緒に、僕だけではリーチできない部分を頼りたいなと思っています。それが結果的に市民の活動や中間支援の活動に有効だと思う。一方でこれまで行政とのやり取りも多く、この数年で堺市の考え方とか、文化課が苦勞していることも理解できてきたので、行政と市民と堺AC、それぞれが言葉や考え方、評価の仕方を理解できるように上手く通しながら活動をしていきたいです。

大澤PO 調査や分析の結果を数字で示す部分に関して、行政の考え方、評価にどう落とし込んでいくかということ、もう一度点検しなければと思いました。こんな結果が出ている、こんな成果が上がっている、こんな課題が見えてきたということが、直ちに予算や制度設計に反映されるのが難しい。ただ来年3年目を迎える堺ACの活動が、次の制度の変更に対して、3年間の結果を示せることはいいタイミングだなと思う。コミュニケーションをとりながら、単年度とは違う解像度でやりたいと思います。そし

て社会包摂という枠を広げていくための戦術が必要だろうと。福祉分野へアプローチするときも文化芸術側にイメージが足りないことがある。例えば高齢者施設で何かやりますとなった時に“慰問”のイメージがある。それと“社会包摂の実現”とはちょっと違うのではないか。そのイメージを伝えるために、事例研究、事例紹介をやった方がいいなと。逆に福祉分野から文化芸術にアプローチしてもらうときに「アーティストに来てもらっても困るのですが」となった際に、例えば演劇を使ったコミュニケーションのワークショップがあったり、認知症のお年寄りとこんな取組もあるようなことを知ってもらって、事例研究みたいなものが紹介できれば手がかりになるんじゃないかと思っています。

上田PD 令和5年度が3年目です。もともと3年ってというのが一つのサイクル、基準だったので、どんなふうに着地ができるのか。それが今のこの時点では分からないのですが。堺ACが市民と行政の間の中で、両方の言語とか、両方の説得の方法が見出されると良いですね。例えば行政であれば数字なのかなとか思うし、市民であれば共通のイメージみたいなもの。その両方に手を広げていくことが大事だと思う。市民に対しては勉強会、交流会、ニュースレター、広報などで、行政に対しては調査研究もしくは他のアーツカウンシルとの比較や情報収集が必要かもしれない。この1年間でも実際にさまざまな活動を見に行ったり、対面コミュニケーションを重ねたりして、最近私はメールや電話での相談も増えています。市民や芸術団体との関係が日常化していくってことも大事だと思う。また地道に堺ACが活動を続けることで各PD、POの専門性がより際立ってきているようにも思う。広げることと、より細かく極めていくことの両方に期待して、大事な3年目である令和5年度を進めていきます。



撮影：成田舞

2023年3月6日 堺市役所にて



令和4(2022)年度 堺アーツカウンシル 活動報告書
2023年10月発行

<発行> 堺アーツカウンシル (堺市文化課)
〒590-0078 堺市堺区南瓦町3-1
TEL 072(228)7143
FAX 072(228)8174
MAIL bunka@city.sakai.lg.jp

<デザイン> 株式会社松岡印刷所



令和5年度文化芸術創造拠点形成事業補助金採択事業